

近代東北アジア諸地域におけるコンブ漁業の比較研究

神長 英輔（新潟国際情報大学国際関係学部 准教授）

はじめに

私は「近代東北アジア諸地域におけるコンブ漁業の比較研究」という研究課題に対して2017年度に研究助成を受領し、2018年1月から2019年12月まで助成金を利用して研究を行った。私は2017年度以前からこの研究課題に関係する研究を進めてきたが、助成金を受けた2018年からの2年の間には、多くの新たな知識を得つつ、各種の研究発表を通じてこれまでの研究を整理することができた。当初は当該年の研究成果を学術誌に発表する予定だったが、これまでに取り組んできたコンブに関する研究の内容がそれなりに多岐にわたり、それぞれの内容も互いに深く関わっていることから、全ての成果をまとめた単著としての発表を目指すことにした。

2018年には本助成の研究課題に即して東アジア近代史学会の年次大会で「戦間期日本のコンブ業とコンブ貿易 グローバルヒストリーのなかのコンブ」という研究発表を行い、その後も戦後の日本のコンブ業についての研究を進めた。しかし、東北アジアの近代、特に19世紀後半における東北アジアのコンブ漁業の大きな発展の背景を知るためにはそれ以前の時期のコンブに関わる諸産業について学ぶ必要があることを痛感した。東北アジアのコンブ業に関する研究は少なく、自らの手で明らかにすべき課題が多かったのである。そのため、2019年は特にそれまで手薄だった前近代の東北アジアにおけるコンブの名称と定義の変遷についての比較研究を進めた。

現在執筆中の単著の内容は大きく三つに分けられる。一つめの問いは東北アジアの人々がコンブという植物をどのように認識してきたのかというものである。いわばコンブに対する科学的なまなざしの歴史をたどる問いである。二つめは人々がコンブをどのように採り、運び、商ってきたのかという問いである。コンブは乾燥して保存し、運ぶことができ、近代以前から産地を離れた広域で消費されていた。つまり、この問いはコンブを手がかりにして東北アジアの諸地域のつながりを明らかにする問いである。三つめはさまざまな地域の文化のなかで食品としてのコンブが果たしてきた社会的な意味を問うものである。特に日本列島ではコンブがさまざまな儀礼の場で使われてきた。日本におけるこの慣習がどのようにできあがってきたのかを歴史的に明らかにしたい。

この研究報告書ではこの執筆中の単著の第1章に相当する部分でこれまで未発表のものを発表する。これは主に2019年に研究を進めた部分である。ここでの問いは上記の三つの第一の問い、すなわちコンブに対する科学的なまなざしの歴史をたどる問いである。上記の経緯があるため、本稿の題名は「近代」となっているものの、本文の多くの内容は前近代の東北アジアにおけるコンブの名称と定義に関わるものになる。

前近代の東北アジアでコンブの科学的な認識を目指してきたのは本草学である。本草学は薬用となる動植物や鉱物を研究する中国古来の薬物学である。古代に日本に伝わった本草学は近世になると博物学的な性格を持つ学問に発展した。日本の本草学者は中国の古典を文献として学びつつ、コンブの産地や食べ方にも関心を広げていった。欧米でも18世紀に博物学が大きく発展した。ヨーロッパの人々はこの博物学の枠組みを使って18世紀から19世紀にかけて東北アジアのコンブを発見し、名づけていった。本報告では東北アジア各地域におけるコンブの命名の経緯を比較し、各地域の人々とコンブの関わり方の特徴を明らかにする。

公益財団法人JFE21世紀財団には心からの感謝の気持ちを伝えたい。本助成は研究期間や使途の自由度が高いため、研究が進むにつれて新たに生じた問いに向き合うこともできた。2年前、助成金を受領した式典の際にJFEグループの関係者の方々と話す場があったが、そこで話した方々がみなコンブの研究に関心を持ってくださったこともとても励みになった。

コンブはよく知られているようで、なかなか知られていない。これからも引き続き、東北アジアにおけるコンブについてのさまざまな知をつなぎ、コンブを手がかりにして現代の私たちの暮らしを歴史学の観点から見直したい。

1. 現代東北アジアにおけるコンブの名称

東北アジアの海はコンブのふるさとである。近年の生物地理学の研究によれば、コンブの祖先は北日本の冷たい海で誕生したとされ、現在でももっとも多くコンブ目の植物が確認されているのは日本を中心とする東北アジアの沿岸海域である¹。コンブは東北アジアを代表する海藻であり、東北アジアを代表する植物である。

現代の日本でコンブという名で扱われている食品は、コンブ科のカラフトコンブ属²に属するマコンブなどの³加工品である。マコンブ「など」と記したが、この「など」には同じカラフトコンブ属の近縁種であるリシリコンブ、ミツイシコンブ、ナガコンブ、トロロコンブ、ガゴメコンブな

¹ Bolton, John J. The biogeography of kelps (Laminariales, Phaeophyceae): a global analysis with new insights from recent advances in molecular phylogenetics. *Helgoland marine research*. 2010, vol. 64, no. 4, p. 263-279. <https://doi.org/10.1007/s10152-010-0211-6>. Abstract.

² この論文では*Saccharina*属の和名をカラフトコンブ属と表記する。なお、本文で述べた分類変更の際に従来の*Saccharina*属の和名のほうを「カラフトコンブ属」から「コンブ属」と改称した試みもある。国立科学博物館. “コンブ目 LAMINARIALES Migula, 1909”. *日本の海藻*. <http://www.tbg.kahaku.go.jp/research/database/seaweedworld/html/kaisou-list/konbu-list.html>, (参照 2018-11-09).

³ 四ツ倉典滋. 日本産寒海性コンブ科植物の学名について. *藻類*. 2007, vol. 55, no. 3, p. 167-168. <https://ci.nii.ac.jp/naid/10019792820/>, (参照 2019-03-13).

どが含まれている⁴。リシリコンブは「利尻昆布」、ミツイシコンブは「日高昆布」、ナガコンブは「^{さおまえ}棹前昆布」や「早煮昆布」などのブランド名でひろく知られているが、日本ではこれらのコンブをひとくくりに「コンブ」と考え、別の種として区別していない人々が多い。

マコンブは長いことコンブ科コンブ属 (*Laminaria*) とされてきたが、2006年に分子系統学の研究成果を反映して学名 (属名) の変更が提案された。その後、この変更はひろく受け入れられて定着した。具体的には、コンブ属 (*Laminaria*) からカラフトコンブ属 (*Saccharina*) に属名が変更され、同時に各種の学名も変更された。

分子系統学とは遺伝子の塩基配列などの遺伝子型に基づいて生物の進化の系統を推定する学問である。四ツ倉典滋によれば、日本産の寒海性コンブ科植物は環境などの違いによる形態の変異が著しいため、種の分類の議論が長く続けられてきた。つまり、見た目でコンブの種を判断するのが難しい例が多かった。そのため、コンブ科植物では塩基配列のデータによる分類が有効であり、21世紀になってから、そうした知見に基づいてコンブの分類が再編されたのである⁵。

現代の中国語には「^{ハイダイ}海带」という語がある。現代中国語の海带は生物種としてのマコンブとその加工品を意味しており、この語は日本のコンブと同じように広く用いられている⁶。一方、現代中

⁴ それぞれの学名は、マコンブが *Saccharina japonica* var. *japonica*、リシリコンブが *Saccharina japonica* var. *ochotensis* (Miyabe) Yotsukura, Kawashima, T. Kawai, T. Abe & L. D. Druehl、ミツイシコンブが *Saccharina angustata* (Kjellmann) C. E. Lane, C. Mayes, Druehl & G. W. Saunders、ナガコンブが *Saccharina longissima* (Miyabe) C. E. Lane, C. Mayes, Druehl & G. W. Saunders、トロロコンブが *Saccharina gyrata* (Kjellmann) C. E. Lane, C. Mayes, Druehl & G. W. Saunders、ガゴメコンブが *Saccharina sculpera* C. E. Lane, C. Mayes, Druehl & G. W. Saunders である。国立研究開発法人海洋研究開発機構。

“カラフトコンブ属 - Biological Information System for Marine Life”. BISMAL: Biological Information System for Marine Life. <http://www.godac.jamstec.go.jp/bismal/j/view/9020263>, (参照 2018-11-09). 国立研究開発法人海洋研究開発機構. “カラフトコンブ属 - Biological Information System for Marine Life”. BISMAL: Biological Information System for Marine Life. <http://www.godac.jamstec.go.jp/bismal/j/view/9020263>, (参照 2018-11-09). “*Saccharina japonica* (Areschoug) C.E. Lane, C. Mayes, Druehl & G.W. Saunders”. AlgaeBase. http://www.algaebase.org/search/species/detail/?species_id=129141, (参照 2018-11-07). “Taxonomy Browser (Genus: *Saccharina*)”. AlgaeBase. <http://www.algaebase.org/browse/taxonomy/?id=5632>, (参照 2018-11-07).

⁵ “*Saccharina japonica* (Areschoug) C.E. Lane, C. Mayes, Druehl & G.W. Saunders”. AlgaeBase. http://www.algaebase.org/search/species/detail/?species_id=129141, (参照 2018-11-07).

⁶ “海带 (褐藻) _ 百度百科”. <https://baike.baidu.com/item/%E6%B5%B7%E5%B8%A6/824011>, (参照 2018-11-09).

国語には「昆布^{クンブ}」という語もある。この昆布^{クンブ}には二つの意味がある。一つめの意味はコンブ目レソニア科の海藻であるクロメ⁷を指すものである⁸。もう一つは伝統医学（中医学）の薬名である⁹。伝統医学の昆布^{クンブ}にはクロメもマコンブも含まれる。こうした語法は日本の漢方でドクダミ^{じゅうやく}が十薬と呼ばれ、ミカンの皮が陳皮^{ちんぴ}と呼ばれている例に近い。

韓国語のコンブは「다시마^{タシマ}」である。正確には、マコンブが「다시마^{タシマ}」、マコンブの変種のホソメコンブが「애기다시마^{エギダシマ}」、ガゴメコンブが「갨다시마^{ケダダシマ}」である¹⁰。原語の意をくんで訳してみるならば、エギダシマは「ぼうやこんぶ」、ケダダシマは「にせこんぶ」というところだろうか。

ロシア語でのコンブの一般的な名は「морская капуста^{マルスカヤ カプスタ}」であり、「海のキャベツ」を意味する。マコンブのほか、ミツイシコンブの変種やチヂミコンブなどにもそれぞれロシア名があるようだが¹¹、それらのロシア名がロシアで広く使われている様子はない。一般にはさまざまなコンブがまとめて「海のキャベツ」と呼ばれ、食品の名としてもこれが一般的である。

このように現代の東北アジアにおいてコンブとは海帯^{ハイダイ}であり、다시마^{タシマ}であり、морская капуста^{マルスカヤ カプスタ}である。21世紀の現在、一般的な食品かつ植物の通称としてのコンブの語義は明快である。一方、東北アジアの各地域で歴史的に「コンブ」と呼ばれてきた植物は実に多種多様である。特に

⁷ 学名は *Ecklonia kurome* Okamura である。国立研究開発法人海洋研究開発機構。 “カジメ属 - Biological Information System for Marine Life”. BISMAL: Biological Information System for Marine Life. <http://www.godac.jamstec.go.jp/bismal/j/view/9020281>, (参照 2018-11-07).

⁸ クロメの中国名には「昆布」だけでなく、「黒菜」、「鵝掌菜」、「五掌菜」などもある。“昆布 (翅藻科植物) _ 百度百科”. 百度百科. <https://baike.baidu.com/item/%E6%98%86%E5%B8%83/604074>, (参照 2018-11-06).

⁹ “昆布 (中药) _ 百度百科”. 百度百科. <https://baike.baidu.com/item/%E6%98%86%E5%B8%83/14230618>, (参照 2018-11-06).

¹⁰ Lee, In Kyu (李仁圭), Kang, Jar Wong (姜悌源). A checklist of marine algae in Korea (韓国産海藻類의 目録). The Korean Journal of Phycology. 1986, vol. 1, p. 317. [<http://img.algaebase.org/pdf/2E07ADD5140622AB38SK41BC517A/49055.pdf>], (参照 2018-11-07). “*Kjellmaniella crassifolia* Miyabe”. AlgaeBase. http://www.algaebase.org/search/species/detail/?species_id=4014, (参照 2018-11-07). “*Laminaria religiosa* Miyabe”. AlgaeBase. http://www.algaebase.org/search/species/detail/?species_id=4025, (参照 2018-11-07).

¹¹ Перестенко Л. П. Водоросли залива Петра Великого. Ленинград, Наука: Ленингр. отделение, 1980, с. 160-161. [<http://img.algaebase.org/pdf/562E32341444428439WIj2F86C4D/12846.pdf>.]

近代以前の「コンブ」にはコンブ科カラフトコンブ属以外の種、つまり現在はコンブと呼ばない海藻も含まれていた。以下ではコンブの歴史的な名称の変遷を地域ごとに概観して比較する。

2. 前近代の中国・朝鮮におけるコンブの名称

中国でコンブを指す語は時代を追って変わってきた。先に述べたとおり、現在は海带がコンブを意味する一般的な語だが、この用語法が一般的になったのは近代以降とみられる。

コンブは20世紀なかばまで中国沿岸には自生していなかった。しかし、古くから朝鮮半島産のコンブが中国に輸出されており、中国ではコンブは朝鮮の産物として知られ、親しまれていた。高句麗（前37-668）の版図だった朝鮮半島の中部以北の日本海沿岸は現代でも天然のコンブの産地である。王民生によれば、高句麗との通商が盛んになるにつれ、朝鮮のコンブが中国の市場に現れ、多くの人々が薬や副食として利用するようになった¹²。

中国における「^{クンブ}昆布」の歴史的な用語法を整理した王賽時によれば、「昆布」とは伝統医学の薬の名称である。王によれば、かつては輸入されたコンブが「昆布」とされていたほか、山東と遼寧では海带（種子植物ヒルムシロ科の海草のアマモ¹³*Zostera marina*）、浙江と福建では黒昆布（レソニア科カジメ属の一種）、その他の地方では裙帯菜（アイヌワカメ科ワカメ属のワカメ *Undaria pinnatifida*）がそれぞれ「昆布」という語で呼ばれていたという¹⁴。つまり、かつては輸入されたコンブだけでなく、中国沿岸に自生していたアマモ、カジメ、ワカメなどが全て「^{クンブ}昆布」だったのである。

中国語の「^{クンブ}昆布」は本草学の用語と考えるべきだろう。本草学は自然物を薬として用いるための学である。山田慶兒によれば、中国の本草学においては、世界と社会と人間には同じ秩序が働いているとする伝統的な世界観による分類と、薬の作用による分類という2つの分類の原理が複合的に共存していた¹⁵。時代が下ると、ここに生態学的な分類や技術的思考の産物である実用的な分類も取り入れられた¹⁶。一方、現代の生物学による分類は進化の系統にもとづく分類である。現代の生物学のまなざしからすれば、古い「昆布」の用語法には混乱があるように見えるが、本草学のまなざしからすれば、形態が異なるいくつかの種をまとめて「昆布」と呼ぶことに問題はない。

¹² 王民生. 中国古代利用海藻的考证. 中国渔业经济. 2001, no. 4, p. 52.

¹³ 現代におけるアマモの一般的な中国名は「大叶藻」である。

¹⁴ 王賽時. 山东海带的历史演变与当代烹饪. 美食研究. 2014, vol. 31, no. 4, p. 2.

¹⁵ 山田慶兒. “本草における分類の思想”. 東アジアの本草と博物学の世界. 山田慶兒編. 思文閣出版, 1995, p. 13-14.

¹⁶ 山田慶兒. “本草における分類の思想”. p. 20.

中国の本草学の集大成である明の『本草綱目』（1590）で著者の李時珍（1518-1593）は「昆布」について次のように記した。

時珍曰く、昆布は、登、萊に生ずるものは搓（よ）って繩索のようにしたものだ、閩、浙に出るものは葉が大きくして菜に似ている。蓋し海中に生ずる諸菜は、性、味が相近く、主たる治療上の効果も大体同様であって、やや同じからぬ点はあるにしても、やはり大なる差異はないものだ¹⁷。

これは、登萊（山東）の昆布と閩浙（福建・浙江）の昆布の形態が異なることは承知の上で、薬の作用が同じならばそれは同じ「昆布」だ、という考えである。本草としての「昆布」の効能は「痰を切り、固くなっている病変部位を軟化・消散し、水滯（水毒）を改善する」ことにある。これらの効能を持つ海中の植物が「昆布」なのだから、アマモもカジメもワカメもコンブも「昆布」なのだ。

『本草綱目』の日本語訳である『頭註 国訳本草綱目』（1929-1934）は「昆布」の注釈に牧野富太郎（1862-1957）の見解を引用して「昆布」をワカメとし、「海帯」をコンブとしている。しかしこの注釈には難がある。『本草綱目』の「海帯」の項には、山東での例として「現に登州地方では、これを乾して器物を束ねるに用いている」とある¹⁸。そもそも『本草綱目』が著された時期に中国本土にコンブは自生していなかったし、さすがにコンブで物を束ねるのは難しい。『本草綱目』の「海帯」の挿絵も、コンブよりは種子植物のアマモに似ている。実際のところ、「海帯」がアマモならば干してもものを束ねることもできる。先述の王賽時によれば、現在でも遼寧ではアマモを「海帯」と呼ぶことがあり、山東でもアマモを「海帯草」と呼んでいるという¹⁹。

主要な産地である朝鮮でコンブはどのように呼ばれていたのだろうか。

宋の徐兢（1091-1153）による『高麗図経』（1124）には「昆布」という語が記されている。『高麗図経』は徐兢が1123年に高麗の開城を訪れた時の見聞を記したものである。記述は「以至海藻昆布。貴賤通嗜」²⁰という短いものだが、高麗の人々が「昆布」をよく食べていたことがわかる。この「昆布」はコンブとみてよい。ただし、ここでも漢語の昆布の読みは明らかではない。おそらくは日本と同じく、固有語の「다시마（タシマ）」と読んでいたように思われるのだが、確証はない。

¹⁷ 李時珍著、白井光太郎校註、鈴木真海訳. 頭註 国訳本草綱目 第六冊. 春陽堂, 1934, p. 517-518.

¹⁸ 李時珍. 頭註 国訳本草綱目 第六冊. p. 515-516

¹⁹ 王賽時. 山东海帯の歴史演変与当代烹饪. 美食研究. 2014, vol. 31, no. 4, p. 2.

²⁰ 朝鮮古書刊行會編. 渤海考. 北輿要選. 北塞記略. 高麗古都徴. 高麗圖経. 朝鮮古書刊行會, 1911, (朝鮮群書大系, 第15輯), p. 493 (高麗図経 第二十三卷 雜俗二).

19世紀前半の『海東繹史』は朝鮮の韓致齋^{ハンチュン}(1765 - 1814) が中国や日本の書物に記された朝鮮関係の記事を編纂した大著である。この本にも「昆布」についての記述が各所にあり、「昆布」が古代の朝鮮（高句麗・新羅・渤海）の特産としてたびたび中国にもたらされていたことがわかる。

『海東繹史』第26巻には「昆布今惟出高麗。繩把索地如卷麻。作黄黒色。柔靱可食」、「昆布生新羅者。黄黒色葉細。彼人採得槎之為索。陰乾舶上来中国」と記されている²¹。ここでの「高麗」は「高句麗」のことである。『海東繹史』の注釈は前者が漢末の『名医別録』の注釈、後者が唐末の『南海薬譜』からの引用だと記している。

『本草綱目』にも『海東繹史』の記述とほぼ同じ文がある。5世紀末に中国の陶弘景が編纂した『本草経集注』は『名医別録』を収録している。『本草経集注』はその後の時代も引き継がれた本草書の古典なので、おそらくはこの記述が広く引用されていったのだろう。

「繩把索地如卷麻」とは『本草綱目』の和訳である『国訳本草綱目』によれば「繩にし束ね括って卷麻のように」したものである²²。現在の日本でこのような形に整えられたコンブは見られないが、コンブの産地であるロシア極東のサハリン州ではよく見かける。マコンブは短いものでも数メートルの長さがあるので、ねじって巻くのも理にかなっている。こうした束ね方はロシア極東では19世紀以来の伝統あるやり方であり、たとえば、19世紀末の二級品のコンブは「直径1フート（約0.3メートル）で巻か」れていた²³。当時、こうした形にコンブを加工していたのは中国人の労働者であり、その輸出先も中国だったことを考えれば、このやり方は中国由来の可能性が大きい。以上のことからみれば、「ねじって麻縄のように巻かれた昆布」はコンブと考えてよいだろう²⁴。

『海東繹史』が中国や日本の書物を参照しているように、江戸時代の日本の本草学も中国や朝鮮の書物を参照していた。『海東繹史』から遡ること1世紀、日本の百科事典『和漢三才図会』（1712）

²¹ 朝鮮古書刊行會．海東繹史．朝鮮古書刊行會，1911，（朝鮮群書大系），p. 561（卷二十六）．

²² 李時珍．頭註 國譯本草綱目 第六冊．p. 517-518．

²³ Кириллов Н. В. Морские промыслы южного Сахалина. Отчет общества изучения Амурского края за 1898 год. Владивосток, 1899, с. 11-12.

²⁴ 蓑島栄紀は古代中国の「昆布」が「朝鮮半島北東部沿岸を産地として、登州など山東半島にもたらされる北方系ワカメであった」という仮説を出している。その根拠として蓑島はいくつかの史料をあげるとともに、「繩把索地如卷麻」を海藻の生体の形と解釈して「『繩で之を把索するに巻いた麻の如し』などとも形容された形態的特徴は（略）寒流系昆布とも齟齬する」（蓑島栄紀．「もの」と交易の古代北方史．勉誠出版，2015，p. 257.）と述べている。古代中国の「昆布」がワカメを含んでいた可能性があるというのはその通りである。しかし、本文で述べたとおり、乾燥した商品としてのコンブならば「繩把索地如卷麻」はよくある形である。この形が古代からあるという証拠はないが、「繩把索地如卷麻」という形の「昆布」はやはりコンブのことではないだろうか。

は中国の「昆布」がコンブであると考証した²⁵。日本の本草学の集大成である『本草綱目啓蒙』(1803)は漢籍の「昆布」はコンブで、「海帶」がホソメコンブだとし、「一名 多士麻」として²⁶いる。先に述べた通り、現代の韓国語のコンブは「タシマ」である。「多士麻」は朝鮮語のタシマと関係がありそうに思えるが、確証はない。

18世紀後半の清の史書である乾隆『欽定大清會典則例』93巻には、朝鮮国王の使節が清の康熙帝(在位1661-1722)に捧げた貢物として毛皮やナマコとともに「海帶菜」という語が記されている²⁷。イ・チョルソンによれば、17世紀に中国東北部の人口増にともなって朝鮮産の海産物の需要が増え、18世紀にはコンブが中国向けの主要な輸出品になった²⁸。実は日本から中国へのコンブ輸出も18世紀後半に本格化している。この時期に朝鮮産や日本産のコンブが中国に多くもたらされ、中国でコンブが「海帶」と呼ばれるようになっていった可能性がある。

3. 前近代の日本におけるコンブの名称

日本の古代の史料に記された漢語の「昆布」の解釈については蓑島栄紀の代表的な研究²⁹のほか、多くの研究がある。各説の詳細には違いがあるが、奈良時代以降の「昆布」が現在のいわゆるコンブ(カラフトコンブ属の各種のコンブ)を指すという点では一致している。

『続日本記』(797)には昆布という語が記されている。文章の内容は「陸奥国の蝦夷のすがのみみこまひる須賀君古麻比留から昆布が献上された」³⁰というもので、須賀君古麻比留が国府までの遠さを訴え、自らが住む地に近いへのむら閑村(現在の宮城県牡鹿郡ないし旧桃生郡とされる³¹)に郡の役所である郡家を置いてほしいと願い出たものである。君古麻比留が住んでいた場所は不明だが、現在でもカラフトコンブ属のホソメコンブが牡鹿半島で採れることを考えれば、この昆布はコンブだと考えてよいだろう。ただ『続日本紀』の原文は漢文なので、ここでの昆布の読みは明らかではない。

²⁵ 寺島良安著、島田勇雄、竹島淳夫、樋口元巳訳注。和漢三才図会 17。平凡社、1991、(東洋文庫、527)、p. 308-309。

²⁶ 小野蘭山。本草綱目啓蒙 2。平凡社、1991、(東洋文庫、536)、p. 114。

²⁷ “Kanripo 漢籍リポジトリ : KR2m0013 欽定大清會典則例-清-高宗弘曆” (巻93) . <https://www.kanripo.org/text/KR2m0013/097>, (参照 2019-03-26). Sturgeon, Donald. “欽定大清會典則例 : 卷九十三 - 中國哲學書電子化計劃” . <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=115299>, (参照 2019-03-26)。

²⁸ 이철성. 연행 (燕行) 의 문화사; 조선후기 연행무역과 수출입 품목. 한국실학연구. 2010, vol. 20, p. 49-50.

²⁹ 蓑島栄紀. 「もの」と交易の古代北方史: 奈良・平安日本と北海道・アイヌ. 勉誠出版, 2015, 398p.

³⁰ 直木孝次郎他訳注. 続日本紀 1. 平凡社, 1986, (東洋文庫, 457), p. 168-169.

³¹ 直木孝次郎. 続日本紀 1. p. 194-195.

コンブの古い和名は「ひろめ」や「えびすめ」である。『本草和名』（918ごろ）には「和名比呂女 一名 衣比須女」³²とある。語源には諸説があるだろうが、幅の広い海藻であることや北方の「えびす」の地の産物であることが由来と考えるとよいだろう。

『延喜式』（927）には、陸奥国が購入して献上した交易雑物として「昆布六百斤。索昆布六百斤。細昆布一千斤。」と記されている³³。また、大嘗祭の御饌^{みけ}、つまり、天皇が即位する儀式で神に捧げられる食物として「昆布筥四合」という記述があり³⁴、注釈として昆布に「ヒロメ」というふりがながつけられている。昆布がコンブであることは確かだが、この時期にはまだ漢語の昆布をこんぶと読んでいなかった可能性がある。ただ、ひろめという和語が廃れ、なぜ漢語の昆布をそのまま音読みでコンブと読むようになり、それが定着したのかはわからない。

日本列島におけるコンブの本場は言うまでもなく北海道と千島列島である。このコンブのふるさとに古くから暮らす人々はアイヌであり、アイヌはコンブについての豊かな語彙を持っていた。知里真志保によれば、アイヌ語でマコンブを指す語はkompu（コンブ、北海道日高の幌別・沙流）とsas（サシ、北海道中北東部・樺太・千島）とsaskina（サシキナ、樺太の真岡）³⁵である。

蓑島栄紀によれば、アイヌ語のコンブが日本語のコンブの語源になったとする説がある一方、日本語のコンブがアイヌ語に入ってコンブになったという説もある³⁶。私は日本語からアイヌ語にコンブが入ったという後者に説得力を感じる。そもそも、アイヌ語の「サシ」は「コンブ」に比べると分布が広い。樺太にも千島にも足を運んだ松浦武四郎（1818-1888）は『蝦夷山海名産図会』で昆布に「サシ」とふりがなをふり³⁷、最上徳内（1754-1836）も『蝦夷国風俗人情之沙汰』で「（扱

³² 深江輔仁. 本草和名. 現代思潮社, 1978, (覆刻日本古典全集), 36ウ. 著者の姓は「深根」が一般的だが、深江ともいう。日本大百科全書(ニッポニカ). “深根輔仁(ふかねの すけひと)とは - コトバンク”. コトバンク. <https://kotobank.jp/word/%E6%B7%B1%E6%A0%B9%E8%BC%94%E4%BB%81-1104632>, (参照 2018-11-09).

³³ 延喜式. 新訂増補国史大系 中編. 吉川弘文館, 1974, p. 592 (巻23 民部下).

³⁴ 延喜式. 新訂増補国史大系 前編. p. 150 (巻7 踐祚大嘗祭).

³⁵ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇) (日本常民文化研究所彙報, 64). 日本常民文化研究所, 1953, p. 253.

³⁶ 蓑島栄紀. 「もの」と交易の古代北方史. p. 309.

³⁷ 松浦武四郎, 秋葉實翻刻・編. 松浦武四郎選集 2. 北海道出版企画センター, 1997, p. 328.

捉島に) シヤシといふ昆布あり」と記している³⁸。間宮林蔵 (1780-1844) の樺太探検記録である『東韃地方紀行』 (1811) にもコンブに似た海藻の「シャシ」の記述がある³⁹。

コンブは日本語のコンブに由来する語であり、アイヌにとってはサシよりも新しい語だとみるべきだろう。アイヌ語は方言の違いが大きい、サシあるいはシャシは樺太から千島まで広く使われていた。しかもコンブを使う日高は蝦夷地の中でも比較的早くから和人がアイヌにコンブを採らせていた地域である。コンブを介して和人と接触があった地域にコンブという語がある一方、他の地域にコンブはみられない。逆に和人の定住が早くから進んだ渡島地方にはサシを含む地名があり、それらはコンブに関係した地名だとされている⁴⁰。

アイヌは古くからコンブのふるさとに暮らしてきた人々であり、コンブとの付き合いは長い。コンブを意味する語の多様さからもそのことがうかがえる。例えば、リシリコンブは樺太ではruru-kin (ルルキナ) ないしruru-sas (ルルサシ) と呼ばれた。ルルとは汁やだしを意味するので、ルルキナは汁草、ルルサシは汁コンブということである⁴¹。現代の日本でも葉の厚いリシリコンブは葉を食べるコンブではなく、高級だし用のコンブとして親しまれている。ルルキナとルルサシはリシリコンブの特徴を思いおこさせる名である。

アイヌは地域によって各種のコンブにさまざまな名をつけていた。オホーツク海沿岸の斜里や美幌のアイヌはトロロコンブをkoyse (コイセ) と呼び⁴²、樺太の真岡のアイヌはraxnusas (ラハヌサシ) あるいはraxkorosas (ラハコロサシ) と呼んだ。ラハヌサシとラハコロサシはいずれも粘液を持つコンブという意味で⁴³、トロロコンブの性質をよくとらえた名である。また、美幌や道東の塘路のアイヌはチヂミコンブをコイセと呼んでいた⁴⁴。

アイヌにとっては外来語と思われるコンブにも歴史がある。コンブは雅語としても使われ、詞曲ではworomare kompu sikopayar (ウオロマレ コンブ シコパヤラ)、すなわち「水に漬けておいたコンブのようだ」という表現を日本語の「青菜に塩」という意味で使うことがある⁴⁵。

³⁸ 高倉新一郎. 日本庶民生活史料集成 4 探検・紀行・地誌(北辺篇). 三一書房, 1969, p. 464.

³⁹ 間宮林蔵 述, 村上貞助 編. “北夷分界余話”. 東韃地方紀行: 他. 間宮林蔵 述, 村上貞助 編, 洞富雄, 谷沢尚一 編注編. 平凡社, 1988, (東洋文庫, 484), p. 82.

⁴⁰ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 253.

⁴¹ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 253.

⁴² 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 252.

⁴³ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 252-253.

⁴⁴ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 252.

⁴⁵ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 253.

山の中では海産物であるサシが忌み言葉とされ、アイヌは山中でこの語を使うことを避けた。たとえば、天塩ではサシをsitukap（シトゥカプ）、すなわち「ブドウ蔓の皮」と言いかえていた。日高の名山の幌尻岳にも同じしきたりがあった⁴⁶。松浦武四郎も浦河の姉茶でこれと同じ話を聞いている⁴⁷。

4. 近代ロシアにおけるコンブの名称

日本海の北側、ロシア極東の沿岸もコンブのふるさとである。先にも記した通り、ロシア語のコンブは морская ^{マルスカヤ} капуста ^{カプスタ}、すなわち海のキャベツという意味である。現代のロシア極東に暮らす人々の大部分はスラヴ系のロシア人やウクライナ人である。サハ共和国を除けば、スラヴ系の人々の人口はロシア極東のほぼすべての地域で9割を超えている⁴⁸。彼らは日常的にコンブを食べている。ウラジオストクを含む行政単位の沿海地方南部の沿岸はコンブの名産地として知られ、中心都市のウラジオストクではコンブ入りのチョコレートがみやげとして売られている。

ロシア帝国が日本海沿岸の沿海州南部⁴⁹を領土にしたのは1860年であり、その後すぐにこの地でロシアの企業家によるコンブ漁業が始まっている。しかし、ロシア語にコンブという語が現れたのはそれより少なくとも100年以上前のことである。

ロシアの遊牧民であるコサックたちはクロテンやキツネなどの毛皮の富を求めてシベリアを東進し、先住民を武力で圧倒して服従させながら17世紀半ばにオホーツク海、すなわち太平洋に到達した。しかし、オホーツク海に注ぐアムール川地域への進出を試みたコサックは清帝国との戦いに敗れ、ネルチンスク条約（1689）によってアムール川地域から排除された。その後のコサックはオホーツク海の向こうのカムチャッカ半島や、さらにその先のアリューシャン列島、そしてアラスカ（ロシア領アメリカ）に活路を求めた。

ロシアによるカムチャッカ半島の探検と支配が本格的に進んだのは17世紀末以降のことである。そして彼らと太平洋の出会いはコンブとの出会いでもあった。

ステパン・クラシェニンニコフ（1711-1755）はロシアの植物学者、探検家として名高い。クラシェニンニコフは1737年から1741年にかけてカムチャッカ半島を探検した。探検調査の成果である

⁴⁶ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻（植物篇）. p. 253.

⁴⁷ 松浦武四郎著, 更科源蔵, 吉田豊訳. アイヌ人物誌. 平凡社, 2002, (平凡社ライブラリー), p. 308.

⁴⁸ “Национальный состав населения по субъектам Российской Федерации”. Федеральная служба государственной статистики. http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/Documents/Materials/tab7.xls, (参照 2019-04-16).

⁴⁹ 「沿海州」は当時の名称であり、現在の行政単位の名称は「沿海地方」である。

『カムチャッカ地誌』（1755）でクラシェニンニコフは海キャベツという海藻を紹介している。彼はこの海藻を *Quercus marina* と同定した。クラシェニンニコフはこの海のキャベツが下痢の薬として服用されていると記したほか⁵⁰、「（船上で観察できる）陸に近いことの重要な手がかりの一つは海キャベツが流れてくること」とも記した⁵¹。

『カムチャッカ地誌』の出版とちょうど同じころ、スウェーデンの博物学者、カール・フォン・リンネ（1707-1778）が植物分類学の記念碑的な著作である『植物の種』（1753）を出版した。『植物の種』によれば褐藻類のヒバマタ属の海藻の一種である。ヒバマタはコンブとは別の海藻である。クラシェニンニコフがカムチャッカでコンブ科の植物を目にした可能性もあるが、『カムチャッカ地誌』に記されたこの海キャベツはおそらく北太平洋産のヒバマタである。ヒバマタはコンブよりずっと小さいし、*Quercus marina* すなわち「海のナラ」という名の通り、ヒバマタは広葉樹のナラ（オーク）の枝葉を思わせる形である。ヒバマタの形はコンブとは似ても似つかず、植物学者のクラシェニンニコフが間違えるとは思えない。

その数十年後、ロシアの商人・探検家、グリゴリイ・シェリホフ（1747-1795）は千島列島やアリューシャン列島を探検していた。シェリホフは1784年にアラスカ沿岸のコディアック島に上陸して先住民を服従させ、アメリカ大陸における最初のロシアの入植地を建設した。

シェリホフはこの島の先住民たちが海キャベツを釣り竿につけて魚を釣っていると記した⁵²。シェリホフによれば海キャベツは約40サージェン（85メートル）もあったという。一つの個体で85メートルとはさすがに長すぎるが、アラスカ沿岸にも分布するジャイアント・ケルプ *Macrocystis pyrifera* (Linnaeus) C. Agardh（コンブ科オオウキモ属のオオウキモ）には全長45メートルに達するものがあるので、2本のオオウキモをつなげればそのくらいの長さになる。先住民は本当に長い海キャベツで釣りをしていたのかもしれない。

⁵⁰ Крашенинников С. П. Описание земли Камчатки, сочиненное Степаном Крашенинниковым, Академии Наук Профессором. Т. 2. СПб, при Императорской акад. наук, 1755, с. 134.

⁵¹ Крашенинников С. П. Описание земли Камчатки, сочиненное Степаном Крашенинниковым, Академии Наук Профессором. Т. 1. СПб, при Императорской акад. наук, 1755, с. 129.

⁵² Шелихов, Григорий Иванович. Росийского купца именитаго рьльского гражданина Григорья Шелехова первое странствование с 1783 по 1787 год из Охотска по Восточному океану к Американским берегам, и возвращение его в Россию. Град св. Петра, Тип. Сытина, 1793, с. 75.

シェリホフの記録が出版されたのとほぼ同じころ、最初のロシア語大辞典である⁵³ロシア・アカデミー辞典（アカデミー・ロシア語辞典）が出版された。この辞典の見出し語に海キャベツがあり、そこには「*Fucus*（ヒバマタ属）」と記されている。この辞書を編纂した帝室ロシア・アカデミーはロシア科学アカデミー院長のエカチェリーナ・ダシコヴァ（1743-1810）の提案で作られた。ダシコヴァは帝室ロシア・アカデミーの初代総裁も務めたことがある。当然ながら2つのアカデミー、帝室ロシア・アカデミーとロシア科学アカデミーは近い関係にある。辞書の編纂者たちは、科学アカデミーで活躍していたクラシェニンニコフの『カムチャッカ地誌』も参考にしたにちがいない。19世紀初めには、ヒバマタ属ではなく、マコンブに近いコンブを思わせる海キャベツがロシアの文献に現れるようになる。例えば、『ロシア地理辞典』（1804）の「カムチャッカ」の項には「（海キャベツを）ジャムにするとよい」と書かれている。この海キャベツは、長さが1サージェンから2サージェン（約2メートルから4メートル）、幅が半アルシン（約0.4メートル）ということなので⁵⁴、形状だけならばマコンブに近い。

少し後のアレクセイ・マルトス（1790-1842）による『東シベリア書簡』（1827）には「カムチャッカのラッコが海キャベツの中で夜を過ごし、嵐をやり過ごす」と記されている⁵⁵。ラッコがコンブの「森」で暮らすことはよく知られている。この海キャベツもおそらくはコンブ科の植物だろう。

明らかにマコンブを意味する海キャベツの用例の最初はワシーリー・ゴロヴニン（1776-1831）の『日本幽囚記』（1816）の記述である。ゴロヴニンはロシア海軍の軍人であり、国後島で測量調査中の1811年に幕吏に捕縛され、その後2年以上にわたって箱館と松前で軟禁された。帰国後に記された『日本幽囚記』によれば、ゴロヴニンは、知人の武士がコンブの漁場をめぐって親族ともめごとを起こしたと記し、さらにコンブが貿易の商品であるとも書いている⁵⁶。

もともと、19世紀前半の海キャベツにはまだ多少の語義の揺れがあった。1820年代前半、ロシア地理学会の創設者の一人で露米会社の社長も務めた海軍軍人フェルディナンド・フォン・ウラング

⁵³ 源貴志. ロシア・アカデミー辞典の系統図. 早稲田大学大学院文学研究科紀要. 第2分冊. 2011, vol. 56, p. 192.

⁵⁴ Максимович Л. М. Географический словарь Российскаго государства, сочиненный в настоящем онаго виде. Ч. 3: К-М. М., Университетская типография, у Хр. Клаудия, 1804, с. 246.

⁵⁵ Мартос А. И. Письма о Восточной Сибири. М., Унив. тип., 1827, pp. 163-164.

⁵⁶ Головнин В. М. Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах : с приобщением Замечаний его о японском государстве и народе. Ч. 3. Санкт-Петербург, Мор. тип., 1816, с. 120.

リ（1797-1870）がロシアの極北地域（ロシア極東や東シベリアの北極海沿岸地域）の探検をおこなった。この調査記録『シベリア北岸と北極海の探検』（1841）には「海のキャベツ」の語が登場する。この海キャベツは北極圏のコリマ川地方に生える陸生の草であり、ウランゲリはこの植物はハマナ *Crambe maritima* であるとしている⁵⁷。アブラナ科のハマナはヨーロッパで食用にされることがあり、キャベツもアブラナ科である。つまり、この海キャベツは「海辺に生えるキャベツ（のような草）」であり、コンブではなかった。医師のレフ・グリーンベルグ（1796-1850）による『ラテン語・ドイツ語・ロシア語医学用語大辞典』（1840）でも海キャベツは日本でもおなじみのハマヒルガオ *Convolvulus soldanella*, *Calystegia soldanella* のことであり⁵⁸、コンブではなかった。

ただし、これ以降に陸生の植物を指す海キャベツの用例は見当たらない。「ダーリの辞典」として知られる言語学者ウラジーミル・ダーリ（1801-1872）の辞典『生きた大ロシア語の詳解辞典』の初版（1865）には、見出し語としてキャベツがあり、その項目の中には「海キャベツ、海藻、ヒバマタ属」と記された⁵⁹。

1860年代には新しい領土の沿海州でマコンブの漁業も始まっており、そうしたマコンブが海キャベツと呼ばれるようになっていた。ロシアでコンブについての学術的な研究が本格的に進むのはさらに先のことだが、海キャベツの定義は1860年代にほぼ固まったとみてよい。

ロシアの人々は探検と調査のなかでたびたびコンブに出会い、折からのヨーロッパ全体における博物学の発展がコンブについての知識の深まりを後押ししたのである。

5. おわりに

昆布は古代から東北アジアの各地でコンブを意味する語だった。しかし、昆布とは第一に本草学の用語であった。実用を重視する本草学の枠組みでは薬効が同じと見なされれば、形態が異なる海藻でも同じ「昆布」と見なされた。そのため、前近代の中国では、現在の分類では全く別の海藻・海草であるアマモ、コンブ、クロメ、ワカメが昆布とみなされた。

⁵⁷ Врангель Ф. П. Путешествие по северным берегам Сибири и по Ледовитому океану, совершенное в 1820, 21, 22, 28 и 24 гг. экспедицией, состоящей под начальством флота-лейтенанта Ф. фон-Врангеля. СПб., 1841, с. 209.

⁵⁸ Гринберг Л. П. Всеобщий терминологическо-медицинский лексикон на латинском, немецком и русском языках со включением всех к физике, фармации, медицинской химии, естественной истории, ботанике, равно как и ветеринарной науке принадлежащихся наименований и выражений и с этимологическим изъяснением всех в медицине употребляемых греческих слов. Ч. 1. Берлин, Г. Реймер, 1840, с. 506.

⁵⁹ Даль В. И. Толковый словарь живого великорусского языка. Ч. 2. М., 1865, с. 705.

ただでさえ本草学はコンブの生態への関心が乏しかったが、それに加えて中国の本草学者が海に生えるコンブを実見する機会はそもそもなかった。コンブはもともと中国沿岸に自生しておらず、前近代の中国ではほぼすべて輸入していたからである。おそらくは生のコンブを見る機会もなかっただろう。

『本草綱目』には「昆布」のほかに「海带」の項目があり、「昆布」と「海带」を区別する試みがなされている。しかし、『本草綱目』の記述を見る限り、その試みは失敗に終わったといっていよう。博物学的な枠組みによるコンブの認識はうまくいかなかったのである。

近世の日本の本草学は博物学に向かって発展しつつあった。日本の本草学はさすがに産地に近いこともあり、各種のコンブを細かく区別するところまでは行った。近世の蝦夷地探検や中国へのコンブ輸出の拡大もコンブについての認識を深める要因になったはずだ。しかし、そうした現場の知と本草学の知がうまく結びつくことはなかった。

日本と朝鮮に共通するのは固有語と漢語「昆布」の関係である。両地域とも古くから漢語の「昆布」が使われていた。時代が下ると、朝鮮では固有語と思われる「タシマ」が定着し、日本では逆に「ひろめ」が廃れていった。この背景はまったく解明できなかった。今後の課題にしたい。

ロシアの人々は新しい領土の東北アジアで出会った褐藻に学名ではない「海キャベツ」という名をつけた。海キャベツが意味するものは18世紀から19世紀半ばまでさまざまに揺れ動いたが、最終的にはコンブに落ち着いた。

実のところ、前近代の東北アジアで各種のコンブ科植物をしっかりと区別し、それぞれの性質に応じて命名して区別していたのはアイヌの人々である。知里真志保によれば、アイヌはある植物の必要な部分にのみ命名するのであり⁶⁰、その点で言うなれば、アイヌによるコンブの命名も実用を重視するものだったのは確かだ。それでも、結果として現在の分類学の結果に最も近い区別をしていたのはアイヌ語だった。

18世紀のコンブはおもに日本列島の北部から長崎や琉球を經由して大量に中国に輸出された。その一方でコンブの分類はあくまでも実用的なものが中心であり、コンブの生態や形状に基づく科学的な分類学は発展しなかった。これは不思議なことではない。現代でも遺伝子型によるコンブの分類学の発展と商品としてのコンブの流通にはほとんど接点がない。しかし、19世紀半ば、欧米に強いられた東北アジアの「開国」はコンブをめぐる学問とコンブ産業の双方に巨大な変化をもたらすことになった。コンブ科植物に対する科学的な認識はごく短期間で深まり、コンブ貿易の内実も大きく変わるようになったのである。

⁶⁰ 知里真志保. 分類アイヌ語辞典 第1巻 (植物篇). p. 10.